

発行所  
**天理教道友社**

〒632-8686 奈良県天理市三島町1番地1  
電話 (0743)63-3726  
郵便振替口座00900-7-10367番

[本紙定価]: 1部60円 1年(送料共): 4,560円  
半年(送料共): 2,280円



今号電子版は  
ココから!

# 天理時報

TENRI  
JIHO

- 時報手配り 7割の拠点で再開/ウクライナ人学生9人受け入れへ ほか… 2・3面
- 「ようばく百花——明日へChallenge」スペシャル …………… 4・5面
- 初夏の親里で演奏会/エッセー「日本史コンシェルジュ」…………… 6面
- 「やまのペラグビー教室」創立50周年 記念交流試合…………… 7面
- 「おやさと瑞穂の記 その3」/文芸小説「ふたり」第2部…………… 8面

立教185年  
令和4年/2022年

6月29日



## 紫陽花に心惹かれ

水無月を代表する花といえば紫陽花。本部神殿への道すがら、そぼ降る雨に打たれ、小さく頭を揺らす愛くるしい姿に、湿りがちな心も明るくなってくる。(この写真をプレゼントします。詳細は4面広告欄で)

## 逸話の季 ITSUWANOTOKI

### 子供にも丁寧な言葉で

6月になりました。すでに梅雨入りしていますが、昨年のように雨の日が続いている感覚はありません。家の近くには昨年と同じ花が咲きましたが、今年は咲いている場所が変わっています。目の前の梅雨空も、同じような曇り空でも昨年の空とは違います。繰り返す季節を楽しみながら、また新たな気持ちで今年の夏を迎えたいものです。

明治16年6月、山田伊八郎と妻のこいそは、長女いくゑを連れて、誕生から満1年のお礼詣りにお屋敷へ帰ります。教祖は大層お喜びになり、「いとに着物を上げておくれ」と仰せられ、赤衣を一着賜りました。

この赤衣を仕立て直して、その着初めにお屋敷へお詣りすると、教祖は、いくゑを背負うて村田長平の豆腐屋の井戸を見に行かれます。このとき教祖は、とても丁寧な言葉をお使いになり、帰ってきてからは「お蔭で、見せてもらうて来ました」と仰せられました。(「稿本天理教祖伝逸話篇」一一二一 いとに着物を)

わずか1歳の幼子にも、とても丁寧に接しておられる教祖。そのお姿が、とても印象的な逸話です。本文では「教祖は、大人だけでなく、いつ、どこの子供にでも、このように丁寧に仰せになったのである」と伝えられています。かつて、ある人に、「教祖の『ひながた』は、まず自分のできることから実践する姿勢が大切だ」と諭されました。その際、あれこれ考えていたときに、この逸話が心に残りました。それからもう40年くらい、幼い子供や若者にも、なるべく丁寧な言葉で接するように心がけています。

おそらく1歳の幼児は、丁寧な言葉とカジュアルな言葉の違い(もちろん、口調の違いは感じるでしょうが)を理解することはできません。しかし、相手に語りかける側の気持ちは、実際に使う言葉によってかなり変わってきます。このことは、20代のころから感じていました。さらに30代、40代、50代と年齢を重ねるにつれて、あらためて言葉づかいの大切さを実感しています。

やはり、まず実行できることから、「ひながた」を範として日々を暮らす意識が大切ですね。

■文|| 岡田正彦



# 時報手配り 7割の拠点で再開



全国各地の約7割の拠点で手配りひのきしんが再開されている

道友社は一昨年、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、『天理時報』の手配りひのきしん活動を4月5日号から一時休止し、郵送による直送へと切り替えた。

以後、外出自粛の段階的な緩和などを受けて、同年8月2日号から一部地域で手配りひのきしんが行われるようになった。

昨年は「緊急事態宣言」が発出された地域で再び手配り休止を余儀なくされたものの、10月13日号の発送分では、休止していた支部のうち、179支部751拠点で手配りひのきしんが再開された。

その後も新規感染者の減少によって地域活動が徐々に平常化されつつある現状に鑑み、手配り事務局では、ひのきしんの再開に向けて、各教区・支部単位で調整を重ねてきた。こうしたなか、今年6月8日号の発送分では、全2千26の拠点でひのきしんが再開。実施率は約7割に上った。

その一つ、青森教区東青支部では、今年4月6日号から手配りひのきしんを再開。青森市内で約10年にわたってひのきしんを続けている田村彰子さん（73歳・陸奥分教会ようぼく）は、届け先の教会や教友と信仰談議に花を咲かせることもあるという。田村さんは「あらためて、おちばの声を地域に届ける御用に携われることをありがたく思う。これからも、体を健康に使わせていただけることへの感謝の心をもって、ひのきしんを続けていきたい」と話した。

## ウクライナ避難民 学生9人受け入れへ

天理大・天理市

天理大学（永尾教昭<sup>のりあき</sup>学長）は16日、天理市と共同で記者会見を開き、ウクライナ国立キーウ大学に在籍するウクライナ人学生9人を新たに受け入れることを発表した。

既報の通り、天理大は今年4月、市と連携して、同大卒業生のウクライナ人女性とその家族の3人を避難民として受け入れ、6月から女性を同大の嘱託職員として雇用するなど、生活面を含めた支援を行っている。

こうしたなか、2003年から天理大と学术交流協定を結んでいるキーウ大学の学生から支援を求める声が数多く寄せられたことから、協議の結果、9人の学生を交換留学生として受け入れることを決定。学生たちは、いずれ

も日本語学習者で、今月下旬から7月初旬にかけて訪日した後、9月から1年間、キーウ大学の講義をオンラインで受けながら、天理大国際学部地域文化学科日本研究コースで日本語を習得する授業を受ける。

この間、天理大は留学生用の寮を無償提供。授業料や光熱費を免除するほか、支援募金から生活援助金を支給する。

永尾学長は「先ごろ職員になった女性にも、受け入れに当たってもらったつもりだ。また、直接サポートするチューター学生を留学生一人ずつに付けて支援していく」と話した。



天理大と天理市は16日、共同で記者会見を実施。永尾学長（左）が受け入れの経緯と支援方針を説明した

なお同大は、当初7月15日までとしていた「天理大学国際支援募金」の期間を当面の間、延長する予定だ。

QRコードから会見の様子を視聴できる



「天理大学国際支援募金」の寄付方法はこちらから



### おやのころ

風が変わるから、火が止まりますのや。  
 「稿本天理教祖伝逸話篇」108「登る道は幾筋も」

6月に入ってしばらく、九州北部では梅雨入り前とは思えないほど暑い日が続きました。車に乗り込み、エアコンのスイッチを入れようとしたのですが、ふと思いついて窓を大きめに開けて走りだすと、外から心地良い風が入ってきました。

毎年この時季になると、自教会にまつわる、あるエピソードを思い起こします。昭和20年、夏の終戦を前にした6月、福岡市内で大規模な空襲があり、教会周辺にも焼夷弾が雨のように降って、一帯は火の海に包まれました。教会に住む人々が懸命にお願いづとめを勤めるなか、神殿の軒先まで火の手が迫ったものの、にわかには風向きが変わり、すんでのところでも類焼を免れた——というものです。戦火をくぐり抜けた神殿建物は、普請から90年を経て、いまなお健在です。



あらゆる災難は、いつ何時、どんな形で私たちの身に迫ってくるかわかりません。先輩方が神様にもたれて通りきる心を定め、その心をお受け取りいただくことで、大難を小難、小難を無難にお連れ通りいただいたように、後に続く私たちも、難澁の中こそ誠の心を忘れず、危険をおおる風の向きを変えていただけるような信仰信念を培いたいと思います。

梅雨が明けるころには、はや年の後半に突入します。年初に定めた目標を胸に刻み直し、親神様から追い風を頂けるような歩みを期して、夏本番に臨みましょう。

（榊）

# 教区月次祭後に神名流し

福島教区

福島教区(平澤勇一教区長)は2日の教区月次祭後、教務支庁正門前で神名流しを実施。管内在住の教友30人が参加した(写真)。



これは、教祖140年祭に向けて機運を高めるとともに、それぞれの心づくりを図る一助

として企画されたもの。

参加者たちは、コロナ禍やウクライナにおける紛争の日も早い治まりを祈るとともに、人間は一れつ兄弟姉妹であるとの自覚のもと、世界中の人々が互いにたすけ合う陽気ぐらし世界の実現を願った。なお、来年からは市内での神名流し、再来年からは福島駅周辺の清掃活動を、併せて実施する予定だ。

教区布教部長を務める生江一行さん(57歳・新河沼分教会長)は、「年祭に向けて、より多くの教友に声をかけ、活動の輪を広げていきたい」と話した。(福島・関本代表社友情報提供)

# 創立120周年記念祭

本島大

本島大教会(片山幹太会長)は5月21日、香川県丸亀市)は5月21日、創立120周年記念祭を執り行った。同日教会では、記念祭に向けて「一手一つ」を成人目標に掲げ、特に次代を担う人材

の育成に力を注いできた。当日は、感染症対策を徹底したうえで記念祭を執行。部内教会長は各自の判断のもと、大教会で参拝した。祭典では、おつとめを勤めた後、真柱様のメッセージを、

片山会長が代読。続くあいさつの中で、片山会長は「どのような節も、親神様が子供可愛いゆえ、お見せくださる親心だと教えられる。私たちは、教会設立の元一日に先人が誓った『親孝心』をあらためて心に治め、これからも一手一つに前進しよう」と呼びかけた。(本島大・向所社友)

# 創立130周年記念祭

大垣大

大垣大教会(藤江正人会長)は5月24日、岐阜県大垣市)は5月24日、創立130周年記念祭を執り行った。同日教会では、3年前から記念祭に向けて「初代・先人・親々の信仰に立ち返り、自らの信仰を深める努力をしま

しょう」を活動方針に掲げ、感謝の心を培い、報恩の道を歩むことを目指して取り組んできた。当日は、感染症対策のうえから参拝者をおつとめ奉仕者に限って記念祭をつとめた。祭典では、大教会世話人の

深谷善太郎本部長があいさつ。続いて、心をそろえて、陽気におつとめを勤めた。この後、藤江会長が記念祭を無事に迎えられたことへのお礼とともに、「初代の元一日に立ち返り、一歩でも近づく努力を重ね、教祖140年祭に向かって、素直な実行をもって一手一つにつとめさせていきたい」と決意を述べた。(大垣大・高橋社友)

# 視点

## 未来からの「てびき」

親里で「立教185年教会長夫妻特別講習会」が開催され、『みちのとも』に両統領のインタビューが掲載されるなど、教祖140年祭に向けての機運が徐々に高まりつつある。

教祖年祭に向かつては「たすけの旬・たすかる旬」といわれるが、それは見方を変えると、自分を含め周囲に身上・事情を見せられることが少なくないということでもある

考で、次のように指摘している。「私は、天理教の教えは、『いんねん』よりも、『てびき』に主体があると、(中略)論じた。しかし因縁を否定するものではない。一つの事態が起こるということ、そのことの原因は、過去から押し上げてくる力と、未来から引張っている力との作用による。(中略)私のいいたいのは、その場合、

過去からの力と、未来から引張っている力の比率である。私は、それを三分七分とみるのである。未来からの力が七分だというのである」(『教祖おおせには』)

この指摘は、とても大事だと思う。現れてきた身上・事情は、原因のほうからは「ほこり」であるが、それを現される親神様の思召からは、親心ゆえの「てびき」なのである。この思召を探り、求めるところに、信仰の有難さと醍醐味があるといえよう。教祖の「ふしから芽が出る」とのお諭し、あるいは先人の「身上・事情は道の花」との言葉忘れず、勇んで歩みを進めたい。(山澤)

# 同僚に劣等感。自分の性格に嫌気が差す

回答者 吉福多恵子 濃飛分教会前会長夫人



Q 仕事ができるうえ、誰からも好かれる同僚に、内心、劣等感を抱いています。彼とはプライベートで遊ぶほど仲が良いのですが、自分と比較すると、苛立ちを抑えきれないことがあります。こんな自分の性格に嫌気が差しています。(20代男性)

A この相談文を読んだ多くの人が「自分もそんな気持ちになった経験があるなあ」と共感されていると思います。私も同じです。あなたの悩みが分かる皆さんと共に考えてみましょう。相談文にある「自分の性格に嫌気が差す」「苛立ちを抑えきれない」という言葉から、自分の気持ちをどうコントロールしていけばよいか回答になるかと思えます。神様は、私たち人間に心の自由

をお許しくございました。自由に使える心で陽気ぐらしができればよいのですが、なかなかうまくいきません。いまのあなたの心も、友人の良いところを評価できるのに、自分は劣等感に苛まれています。確かに社交的な人といえると楽しいのですが、少し内向的な人の物静かな態度に惹かれる人もいます。もの見方を変えると、新しい気づきがありますね。

いま、あなたの苛立つ心を治めるのは自らの心でしかありません。教祖は、心の癖の直し方を「八つのほこり」に説き分けて教えてくださいました。「をしい、ほしい、にくい、かわい、うらみ、はらだち、よく、こうまん」。心のほこりは、神様の教えを帯として、おつとめやひのきしんをすることで払うことができます。気がつけば、友達も自分も大切に思える明るい心が湧いてきているでしょう。

身上・事情などに関する悩みをお寄せください。個人情報厳守いたします。●〒632-8686 天理郵便局私書箱30号 天理時報「人生相談」係 ●ファクス=0743-62-0290 ●Eメール=jihou@tenrikyo.or.jp

# ようばく 百花 SPECIAL

## 明日へ Challenge

始めたばかりのころは、同世代の仲間との関わり方が上手くな



「みんなの教室」のスタッフを務めている金谷さん(写真左)

帰宅する子供たちを笑顔で見送る

### フリースクール

不登校やひきこもりをはじめ、軽度の発達障害などがある子供を受け入れ、学習活動、教育相談、体験活動などを行う民間の教育機関。子供の居場所づくりや医療機関と連携してのサポートなど、それぞれの方針や教育理念によって活動内容は多種多様だが、子供たちの主体性を尊重した学習形態を有する点は共通している。地域の学校と連携し、フリースクールへの登校が、学校の出席扱いとされるケースも出てきている。現在、全国に400カ所余りのフリースクールが設置されている。

当初から子供たちの自由度の高い体験を重視してきた。「ゲームの実況動画を作ってみたい」「ファッションモデルになってみたい」など興味のあることを体験し、それを学びに「変換」するのだ。この方針は、大学時代に留学したアメリカの教育現場で学んだことを参考にしている。

子供たちが「やってみたい」ことを体験させる教育にチャレンジするなか、その時々、不思議な巡り合せて活動に賛同する人が現れた。いまでは協力者が入り代わり立ち代わり教会に入力し、さまざまな人の集いの場に

「みんなの教室」に来る子供たちは、皆いきいきしている。それも、子供のためにと一心に寄り添う高部さんの存在があつてこそだと思ふ」と話す。

「子供たちには、興味のあることや好きなことを経験し、得意なことを見つけて夢を抱いてほしい。そうすれば、自分で考えて行動するために必要な「生きる力」を伸ばしていけると思う。子供たちが自分らしく生きられる人に成長できるように、これからも寄り添い続けたい」

文 加見理一 写真 根津朝也



# 不登校の子供に寄り添う “生きる力” 伸ばす学び場

もつと子供たち一人ひとりに寄り添いたいと思いが芽生え、どんな子供でも集まれる場所をつくりたいと思った。

子供への対応に悩むことが少なくなくなった。そのたびに家族に相談し、神殿にぬかずいて、自らの至らなさを反省した。

未信仰の金谷道範さん(58歳)は、4月から「みんなの教室」のスタッフを務めている。金谷さんは少年院職員を退職後、幼児教育を支援しようと絵本屋を開業。昨年「みんなの教室」の活動をすると、数多くの絵本を寄贈してきた。こうしたなか、子供のために尽くす高部さんの姿に感銘を受け、スタッフとして自ら協力を申し出た。

5月には、スタイリストやメイクアップアーティストなどの協力のもと、子供が主催するファッションショーを教会の敷地内で開催。当日は地域住民ら約250人が訪れるなど盛況を博した。

現在、一般社団法人フリースクール等連合会で業務執行理事兼副会長を務めている高部さん。今後、子供を支援する各地の人々の相談役などを担う。将来は日本だけでなく、世界中の子供たちに関わっていききたいの夢を持っている。



フリースクール「みんなの教室」代表 高部春菜さん

高部さんは、子供たちの“生きる力”を伸ばす教育に取り組んでいる(4月27日、別府市の本部直属安東分教会で)

べての子供たちの味方でありたい。こう話すのは、別府市のフリースクール「みんなの教室」代表を務める高部春菜さん(30歳)。

人きょうだいの長女として育った。幼少から少年会活動に参加し、教会に入力する。お兄さん・お姉さん」に面倒を見てもらった。やがて自ら下の子供たちのお世話をするようになった。

「眼うるおいの守護のすごさ」—涙は外気と接する眼を酸化や炎症から守り、眼の表面をコートする。これらを一瞬の瞬きでしている。

午前10時、フリースクールを利用する小学生たちが教会の大広間へ。早速、「今日、自分がやりたいこと」を用紙に記入し、自主学習の時間が始まった。

念願だった子供と関わる仕事に就いたが、ほどなく児童が学校生活や家庭内でさまざまな悩みを抱えていることを知った。

「眼うるおいの守護のすごさ」—涙は外気と接する眼を酸化や炎症から守り、眼の表面をコートする。これらを一瞬の瞬きでしている。

現在、全国の小中学校の不登校児童・生徒数は19万人以上に及ぶとされる。その背景には、交友関係のもつれや複雑な家庭環境などさまざまな問題があるという。こうしたなか、不登校の子供たちの“学び場”として、大分県別府市内で初のフリースクールを立ち上げた、元小学校教諭の女性ようばくがいる。彼女がチャレンジする、子供たちの“生きる力”を伸ばす教育とは。

どんな子供でも 集まれる場所 5 少年会活動に参加し、教会に入力する。お兄さん・お姉さん」に面倒を見てもらった。やがて自ら下の子供たちのお世話をするようになった。

スキット Vol. 38 野田秀樹 檀れい 鈴木大地

道友社定期刊行物 みちたもと 立教185年7月号

陽気 7月号はコレ 特集 人が育つ力 ノーサイン野球の目指すもの

逸話の季 ITSUWANOTOKI 写真プレゼント応募方法

令和5年度 一れつ会扶育生 志願案内

# 初夏の親里で演奏会

## 音楽トピックス 2 題

初夏の親里では、管内学生による音楽の演奏会が徐々に再開されている。天理高校弦楽部・OB会の第11回「ふれ愛ストリングス」が4日、天理高吹奏楽部の第39回「定期演奏会」が11、12の両日、それぞれ開かれた。管内高校生による各ステージの様相を紹介する。

### 家族で弦楽鑑賞 3年ぶりに



第11回ふれ愛ストリングス  
天理高弦楽部・OB会

天理高校弦楽部・OB会は4日、第11回「ふれ愛ストリングス——家族でふれあう弦楽器の調べ」を、3年ぶりに陽気ホールで開催。会場には225人の家族連れが詰めかけた。

同演奏会の趣旨は、親子で弦楽器の演奏を気軽に楽しんでもらおうというもの。

ステージはJ・シュトラウス2世作曲の『トリッチ・トラッチ・ポルカ』で幕開け。続いて、クラシックの名曲のほか、『アンパンマンのマーチ』や『ロマンスの神様』など、幅広い世代に馴染みのある曲が奏で

「ふれ愛ストリングス」では、天理高弦楽部が同部OBと共に、3年ぶりに舞台上で演奏した

（4日、陽気ホールで）

られた。

また、演奏に合わせて弦楽部員がダンスを踊る場面もあり、明るい雰囲気観客を楽しませた。

恒例の参加型企画「イントロ当てクイズ」では、人気アニメの主題歌などが披露され、会場は大いに盛り上がった。

### 伝統の天理サウンド響かせ



第39回定期演奏会  
天理高吹奏楽部

部員たちは、一手一つに心をそろえて演奏した（12日、天理市民会館で）

天理高校吹奏楽部は11、12の両日、第39回「定期演奏会」を天理市民会館で開催、県内外から多くの吹奏楽ファンらが来場した。

両日も同じプログラムで実施。第1部は、吹奏楽で長年親しまれている定番曲『フェスティヴォ』（ヴァーツラフ・ネリベル作曲）で開幕。続いて今年のコンクール課題曲や、『ハンガリー狂詩曲第2番』（フランツ・リスト作曲）を演奏した。

第2部のスタートは『新・童謡オープニング』（岩井直博編曲）。『春がきた』や『たき火』などの童謡14曲をメドレーで演奏した。また、1年生によるダンスなどのパフォーマンスで会場を盛り上げた。

武田直也キャプテン（3年）は「日ごろ演奏を聞いてくださる方々に『どう感じてもらいたいかな』を一人ひとり考えて、一手一つの演奏をつくっている。これからも伝統の「天理サウンド」を届けられるよう、練習に力を入れていきたい」と話した。

### 読者のば

#### 亡き夫の思い受け継ぎ 信仰を末代へ

栢下豊子（81歳・京都市）

昨年11月、所属教会の団参に家族で参加した際、4人の孫のうち最年少の18歳の孫が初席を運びました。

そのとき、孫の代まで信仰が伝わっていることがうれしくて、出直した夫の姿がまぶたに浮かびました。

夫の家系は代々、父親が短命で、孫の顔を見ることがなく出直していません。そんな中も、信仰の代を重ねるうちに、夫の代で孫の顔を見ることができたのです。

夫は初孫が生まれたとき、「この喜びを孫の代まで伝え、3世代揃って信仰させていたたく」と決意し、縦の伝道により力を入れるようになりました。

以後、夫は所属教会の月次祭に孫を連れて一緒に参拝したり、おぢば帰りをしたりするなど、孫たちが身近に教えを感じることができるよう精いっぱい努めました。

夫は6年前に74歳で出直しました。その後、孫たちは皆、17歳を過ぎると別席を運ぶように。亡き夫の思いがしっかりと伝わり、自ら信仰を求めようとすると孫たちの姿を、とても頼もしく感じています。

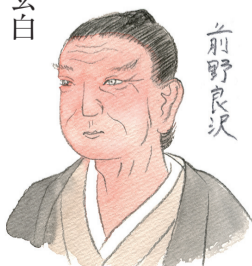
また、孫たちは大学や仕事が休みのときは、所属教会の月次祭や、わが家の講社祭に参拝してくれます。家族ぐるみで信仰できることに、いま喜びいっぱいの毎日を過ごしています。

これからも、亡き夫の縦の伝道の思いを受け継いでいきたいと気持ち新たにしています。

### 日本史 コンシェルジュ

「歴女、がご案内いたします」

#### 白駒妃登美 Shirakoma Hitomi 不屈の心が 歴史をつくる



日本初の本格的な西洋医学の翻訳書『解体新書』。

この翻訳事業は、若狭（現在の福井県）小浜藩の医師・杉田玄白と、豊前（現在の大分県）中津藩の医師・前野良沢を中心に進められました。

1770年、良沢は遊学中の長崎で『ターヘル・アナトミア』という、オランダ語で書かれた人体の解剖学書を手に入れました。ちょうどこのころ、江戸幕府は医学の発達のために解剖を許可したばかり。翌71年春、江戸に戻った良沢は、杉田玄白と共に、処刑場で罪人の死体の解剖に立ち会います。

実は玄白も、別ルートで『ターヘル・アナトミア』を手に入れました。二人は、それぞれ持ち込んだ解剖図と実際の解剖を見比べ、あまりの正確さに驚きます。そして、この本を日本語に翻訳しようとして決意するのです。

蘭学を学んだ経験のある良沢は、単語の一部を理解できましたが、ほかのメンバーは、オランダ語の知識がほぼゼロ。当然、分からない単語が続出し、彼らは長崎から江戸にやって来たオランダ通詞（通訳を担当する幕府の役人）に教えを請うことになりました。ところが良沢の質問に、オランダ通詞は答えることができませんでした。しかし、歴史を変える人物の考え方というのは、素晴らしいです。

ね。良沢と玄白は「自分たちは、オランダ通詞にさえないことを成し遂げようとしているのだ！」と、闘志を一層かき立てられたのです。とはいえ、闘志だけで翻訳できるほど現実には甘くありません。オランダ語の言葉の中に、どうしても日本語に置き換えられないものが出てきました。つまり人体の器官や組織で、日本語の名前がまだついていないものがあつたのです。結局、彼らは言葉そのものを作っていました。「神経」「動脈」「軟骨」などは、解体新書の翻訳で生まれた言葉です。こうして彼らの不屈の精神と創意工夫が、不可能とも思われた事業を成功へと導き、74年に『解体新書』は発刊されました。

その後も良沢はオランダ語の書物の翻訳に尽力しますが、本来の藩医としての仕事を怠つていないと、同僚から訴えられたことがあつた。これに対し、中津藩主・奥平昌鹿は「医師としての日々の仕事も大事だが、後世の民に有益なことを成そうとするのも立派な仕事である」と、良沢を支援し続けました。実は高価な『ターヘル・アナトミア』を良沢に買い与えたのも昌鹿でした。偉業の陰に名君の存在があつたことも、記憶に留めておきたいですね。

ね。良沢と玄白は「自分たちは、オランダ通詞にさえないことを成し遂げようとしているのだ！」と、闘志を一層かき立てられたのです。とはいえ、闘志だけで翻訳できるほど現実には甘くありません。オランダ語の言葉の中に、どうしても日本語に置き換えられないものが出てきました。つまり人体の器官や組織で、日本語の名前がまだついていないものがあつたのです。結局、彼らは言葉そのものを作っていました。「神経」「動脈」「軟骨」などは、解体新書の翻訳で生まれた言葉です。こうして彼らの不屈の精神と創意工夫が、不可能とも思われた事業を成功へと導き、74年に『解体新書』は発刊されました。

# 「ちびっこラグビー」はつらつプレー 「やまのべラグビー教室」 創立50周年



子供たちは憧れのOBたちを前に、元気いっぱい青い芝生を駆け抜けた  
(12日、親里ラグビー場で)

## 親里で記念交流試合

昨年、創立50周年を迎えた天理市の幼少年向けラグビースクール「やまのべラグビー教室」は12日、親里ラグビー場で記念交流試合を開催。県内外のラグビースクール4チームから計198人の「ちびっこラグビー」が集まり、はつらつとプレーした。

同教室は、<sup>くしびきえいきち</sup>櫛引英吉・同教室監督 (88歳・人舞分教会ようぼく) と <sup>えのもときちお</sup>榎本吉雄氏 (故人) が「子供たちにラグビーを教えて、共に楽しみたい」との思いから、昭和46年に奈良県内の幼少年向けのラグビースクールとして発足。子供たちが <sup>だえん</sup>楕円球に親しみ、楽しみながら基礎を学ぶ場を長年提供してきた。

所属選手のほとんどが天理小学生で、OBの中には、天理中学校、天理高校のラグビー部を経て、大学・社会人チームで名を馳せた名選手が少なくない。日本代表56キャップを誇る「天理ラグビーの申し子、立川理道選手 (32歳・但八分教会みちのり布教所ようぼく・クボタスピアーズ船橋・東京ベイ所属) をはじめ、今季は9人の選手が日本ラグビーの最高峰「ジャパンラグビーリーグワン」の各チームに在籍した。

現在「天理ラグビークラブ」のラグビースクールとして活動している同教室。幼児から小学6年生までの計91人が、シーズンとなる9月から翌年5月にかけて練習している。

## ラグビーの楽しさ伝えて

当日は入梅前の晴れ間が広がり、山あいの

ラグビー場に柔らかな風が吹き抜けた。

オープニングセレモニーでは、<sup>よしのり</sup>田中善教・同教室副室長があいさつ。「この教室では長年、楽しむことと、感謝することを子供たちに伝えてきた。ここでの経験を糧に、これからの人生をより豊かに、素晴らしいものにしてもらいたい」と話した。

記念撮影の後、グラウンドを分けて試合開始。各コートでは、学年別の対抗戦や同教室OBとのタグラグビー (タックルの代わりに、選手の腰に付けた帯状のひもを奪う、ラグビーを簡易にしたゲーム) などが行われた。

子供たちは元気いっぱいプレーに興じ、時には憧れのOBからアドバイスを受けるなど、世代を超えて交流を深めた。



OBの一人で、子供たちの求めに応じてサインをしていたのは <sup>かづま</sup>島根一磨選手 (25歳・作州分教会ようぼく・埼玉パナソニックワイルドナイツ所属)。天理生まれの天理育ちで、同教室のコーチを務めていた父親の影響からラグビーを始めた。その後は天理中・高・大のラグビー部でキャプテンを務め、現在、ジャパンラグビーリーグワンの初代覇者・埼玉パナソニックワイルドナイツに所属している。

島根選手は「この教室では「楽しむラグビー」を教わり、チームとして一致団結することや「感謝するラグビー」を学んだ原点でもある。ここでプレーする中で、子供たちがラグビーの楽しさを知ってくれれば」と話していた。

QRコードから、やまのべラグビー教室50周年記念イベントの様子を見ることができる



### ラジオ「天理教の時間」

毎週土曜か日曜の早朝放送

テーマ

## 家族円満

### 7月の放送予定

- ▶ 7月2日・3日 第1185回「家族」
- ▶ 7月9日・10日 第1186回「ご近所さんの保健室」
- ▶ 7月16日・17日 第1187回「目指せ「大きな家族」」
- ▶ 7月23日・24日 第1188回「家族みんなでお出迎え」
- ▶ 7月30日・31日 第1189回「今がイチバン！」

☆「おさしづ春秋」第4回「ある少年の夏休み」は7月9日・10日放送

過去の放送分は天理教ホームページ「ラジオ「天理教の時間」」でお聴きいただけます。



## 訃報

澤木道之さん (91歳・浅草大・梅盛分教会長) 5月18日出直された。大田調布支部啓発委員会委員を務めた。東京教区。

前川信子さん (86歳・東神田大・眞勇光分教会前会長夫人) 5月29日出直された。大教会准員、教区婦人委員会委員を務めた。熊本教区。

小椋美代子さん (97歳・伊野大・中伊予分教会長) 6月3日出直された。愛媛教区。

岡部うめ子さん (95歳・小牧大・拓北分教会5代会長) 6月3日出直された。北海道教区。

守屋佐大男さん (87歳・山名大・山名義分教会初代会長) 6月3日出直された。大教会役員を務めた。静岡教区。

江口恵美子さん (83歳・京城大・順真分教会長) 6月4日出直された。大分教区。

喜多道秀さん (87歳・東海大・東中分教会長) 6月5日出直された。三重教区。

新田弘一さん (82歳・南海大・土生分教会長) 6月5日出直された。大教会准員、日高支部長などを務めた。和歌山教区。

北村植夫さん (92歳・嶽東大・信更分教会前会長) 6月6日出直された。長野教区。

鈴木とめさん (94歳・錦江大・錦道鈴分教会長) 6月7日出直された。静岡教区。

松原 敏さん (94歳・鹿島大・伏木分教会前会長夫人) 6月7日出直された。富山教区。

奥田輝雄さん (85歳・上之郷大・錦綱分教会長) 6月8日出直された。大教会役員を務めた。奈良教区。

神谷治雄さん (78歳・東愛大・盛富士分教会長) 6月8日出直された。大教会准員、西三支部長を務めた。愛知教区。

樋口サチエさん (84歳・山名大・東陽城分教会2代会長夫人) 6月9日出直された。神奈川教区。

辻尾一子さん (102歳・中河大・陶器坪分教会前会長夫人) 6月10日出直された。大阪教区。

井川 初さん (99歳・大鳥大・大橋分教会前会長) 6月10日出直された。大教会役員、大阪教区東成支部長を務めた。奈良教区。

川淵節子さん (93歳・防府大・福江分教会3代会長夫人) 6月10日出直された。長崎教区。

石川フミさん (100歳・城法大・城琴分教会長) 6月11日出直された。北海道教区。



おやしきの北東には、教祖のご在世当時の風景を彷彿させる豊かな田園風景が広がり、親神様にお供えするお米が昔ながらの方法で栽培されている。前回の「苗代づくり」に続いて、今回は「田植え」を紹介する。

4月30日に苗代に蒔かれた種は、6月初旬には15センチほどの緑鮮やかな苗に成長した。その間、本田では田んぼをつくるための「田起こし」が行われていた。実は、稲の刈り取りを終えた冬の間、この田では、親神様にお供



6月16日、天理小学校5年生76人が田植えを体験した

## すべて人の手で行う「田植え」

苗は3本を束ねて1株にして植える。ここでは、機械で行う一般的な田植えと比べて、苗と苗の間隔を1・5倍ほど広く取っている。

空いている余地にはレンゲソウの種が蒔かれる。この麦や野菜の収穫後に残った堆肥や残渣が肥料となり、レンゲソウが緑肥となつて稲の成長をたすけるので、稲を育てるときには、これといった肥料を施す必要がないのだという。

田んぼづくりは、まず田をトラクターで耕して、水を引き、畦切り、畦こね、畦塗といった防水作業を行ったうえ、代かきをして平らに均し、水位を調整すれば完成。いよいよ田植えに取りかかる。

ここで田植えは、昔と同じやり方で、すべて人の手で行うので時間と労力を要する。しかし、その分、管内学生や本部勤務者、またおやしきとふしん青年会ひのきしん隊や少年会、直属ひのきしんなど連日、大勢の人たちが代わる代わるひのきしんに駆けつけて行くので、とても賑やかだ。6月16日には天理小学校5年生の児童たちが田植えを体験、子供たちの元気な声が響いた。



苗は3本を束ね1株にして植える

苗は3本を束ねて1株にして植える。ここでは、機械で行う一般的な田植えと比べて、苗と苗の間隔を1・5倍ほど広く取っている。

このことについて、教会本部管財部の担当者・森本孝一さんは「これは病気対策です。稲は成長すると扇状に分葉して広がるので、間隔が狭いと稲同士ぶつかり合つて風通しが悪くなり、これが病気の原因となります。ここでのお米づくりは農薬を使わないので、こうした病気から守るための工夫を凝らして育てています」と語った。

森本さんの説明によると、植えられた苗は、だいたい1株で10本から20本の茎に分葉し、その1本の茎の穂先に100粒ほどのお米が実るので、1株の稲から、およそ1千粒以上のお米ができるという。その話を聞いて『稿本天理教祖伝逸話篇』の「30 一粒万倍」のお話を思い出した。

教祖は、あるとき一粒の粉種を持って、飯降伊蔵に向かい、「人間は、これやで。一粒の真実の種を蒔いたら、一年経てば二百粒から三百粒になる。二年目には、何万という数になる。これを、一粒万倍と言うのやで。三年目には、大和一国に蒔く程になるで」と、仰せられた。

森本さんは毎年、この一粒万倍のご守護を直に目にし、親神様のお働きを一層感じていると語る。田んぼ一面に植えられた苗は、これから夏にかけて急速に成長していくが、無事に秋の実りを得るためには、丹精のさまざまの労苦が必要となる。教祖が仰せになる「真実の種」も、蒔くだけでなく、懇ろに丹精してこそ実を頂けるとかと思いを新たにしたい。

下記QRコードから、「おやしきと瑞穂の記」の過去記事を見ることができます



(文||諸井道隆)

### 文芸 連載小説

作/片山恭一 画/リン

## ふたり [第2部]

### 波のきらめきに

第17話 誰も見たことがなかった世界

少年は店に入ってきたときから、小さなゲーム端末を操作している。両手の親指でめぐるしくボタンを押しつづけて片時も休むことがない。小学三年生というから、さとしよりも二つほど下になる。「いつもこうなんです」。母親は困ったように言った。「無理に取り上げようとすると泣き叫んで抵抗するんです」。保育園のときから、みんなと一緒に座っていることができなかった。いつも一人で遊び、何も感じていない様子だった。小学校では授業に参加するのが難しくなった。基本的な指示には従うものの、感情表現がほとんどなく、まわりで起こっていることを気にかけない。誰かが身体に触れると、全身の力をふりしぼって叫びつづける。



「一つだけ集中できるのがゲームなんです」。そう言って、母親は大きなため息をついた。「狙撃ゲームっていうんですか、倒した相手の数やスピードを競うゲームらしいんですけど」。カンには医者やカウンセラーではないから、何かアドバイスをするわけではない。もともと無口なので、黙って話を聞いていた。分析も解釈も価値判断もしない。そんな様子に、かえって相手は安心するのかもしれない。若い母親は重い口を開いて悩みを打ち明けはじめた。「きつと居心地がいいんだろうと思いま

す。高得点をあげて注目されることもあ

るらしいので。でも将来のことを思うと心配になります。あんなに没入している

と、そのうちゲームから出てこれなくなるんじゃないかって」

人間がいろいろなものを発明するのも考えものだと思う。ゲーム機がなければ、あの少年だって自分の居場所を見つけた

だろう。本のなかとか、自然のなかとか……そう考えると、のぶ代さんの「えほんの郷」は前途多難かもしれない。ゲームに夢中になっている子どもを、絵本の世界に連れてくるのは難しいだろう。虫を捕ったり魚を釣ったりするのも、そのうちゲームのなかでやるようになるとは思えない。

「夜明け前の海で波を待っていたときのことで。海

の向こうから、朝が近づいてくるのが感じられました。海面が輝きはじめます。でも太陽はなかなか顔を出してくれませ

ん。どのくらい時間が経ったでしょう。ふと何か顔をかすめたようでした。誰かが耳元で言葉にならない言葉をささやいて通りすぎたみたいでした。

つぎの瞬間、それは姿を現しました。ぼくが発見するまで、誰も見たことがなかった世界。海の上や自然のなかでは、そんなことがよく起こります。何かを発見したとき、そこは前とは少しだけ違つたところになっています。」

「ふたり」のバックナンバーを道友社HPで公開中。登場人物の相關図や作者のプロフィールも閲覧することができま。下記QRコードからアクセスしてください。

